

# 実習場面での運動遊び指導への関わり方に影響を及ぼす要因について

## Factors that affect how you are involved in exercise play instruction in kindergarten and childcare training

中尾 健一郎

### 1. 研究の背景

保育者が乳幼児の体を動かす機会をつくり、その活動に積極的に関わっていくことは、保育内容の身体的発達に関する視点および領域「健康」で示されているとおり、子どもが自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養うために重要である。また、平成24年に文部科学省により示された幼児期運動指針では、子どもの基本的な運動能力低下が指摘され、子ども時代の身体活動量や健康状態が大人になってからも関係があることを示した上で、生活習慣の中に多様な動きが経験でき、発達の特性に応じた遊びを採り入れ、楽しく体を動かす時間を確保することをポイントに身体活動の量と質を確保することを推進している。体を動かす機会をいかに創出するかということは生涯の健康の維持増進にかかわることとして保育者が取り組まなければならない問題であり、保育者養成校においても授業内容に反映させながら意識して指導しているところである。

筆者はこれまで浪越(2018)、青木(2019)らとの研究で、運動指導における保育者養成校の課題について検討してきた。その結果、保育者を目指し養成校で学ぶ学生は、主体的に体を動かす遊びを中心とした身体活動を幼児の生活全体の中に確保していく重要性は認識しているものの、実際には運動場面へのかかわりに意識の差があり、過去の運動経験を含めた自己の運動への関与度が運動遊び指導や運動技能に対する自己評価、自発的に学ぶ姿勢に影響を与えていることが示された。具体的には、運動への関与度が低い群ほど運動指導に対してネガティブな意識を持っており、関与度が高い群ほど運動指導に対してポジティブであることが明らかとなった。保育者を目指す学生に運動への関心は持ってもらいたいという思いはあるが、必ずしもすべての学生が運動経験が豊富で、運動が得意というわけではない。自己の運動経験や運動への関与度に関わらず、授業を通して学生の運動指導への意識と行動をどう変えていくかが養成校としての1つの課題でもある。

そこで、本研究では実際に保育現場で子どもとの運動遊びの場面で学生がどのような関わり方をしているのか、実習時の様子を調査し、実際の関わり方に影響を与える要因は何なのかを明らかにする。そして養成段階でどのような援助や指導が必要であるか、筆者が実習後の振り返りレポートの分析より、運動遊び指導における学生の意識について調査した過去の研究(中尾,2013)結果も含め、筆者の担当する「子どもと運動」及び「保育内容演習Ⅰ(健康)」の授業内容の振り返りつつ、今後の授業改善に向けて示唆を得ることを目的とする。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、保育者養成校における運動指導の課題解決に向けて、学生の運動遊び指導場面へ関わり方を検証することで、それに影響を与える要因に明らかにし、今後の授業改善に向けて示唆を得ることである。具体的には第1に本学2年生が実習場面において、どの程度運動遊びへ関与したか、その度合い(以下、関与レベル)を明らかにすること、第2に関与レベルにどのようなことが影響を与えているのか、その要因を明らかにすること、第3に以上の結果を受けて、今後の授業改善に向けた課題を明らかにすることである。

### 3. 研究の方法

#### 1) 対象

令和2年10月29日に本学保育学科保育専攻2年生の保育士資格及び幼稚園教諭免許取得予定者94名に対して行った。

#### 2) 調査方法及び内容

調査はGoogle formによるWebアンケート形式で行った。質問内容は運動遊びへの関与レベルについては「体を動かすあそびのための環境の質」評価スケール(Archer and Siraj,2017 秋田・淀川他,2018)におけるサブスケールの中で「保育者が、屋内・屋外で子どもたちの運動にかかわること」に関する項目を参考に、「最低限」から「とてもよい」までの7段階のレベルで項目を作成し調査した。また学生の運動・スポーツ活動および運動遊び指導に対する意識については浪越(2017)、青木(2019)らの調査項目を参考にして作成し調査した。

#### 3) 分析手続き

運動遊びへの関与レベルと学生の運動・スポーツへの意識と運動遊び指導に関する意識について分析をし、その傾向を明らかにした上で、実習時の運動遊び指導への関わり方との関係について分析を行った。統計処理については、統計処理ソフト SPSS ver.15.0 を用いて分析を行った。

#### 4) 倫理的配慮

アンケート調査の実施にあたっては、その趣旨を対象者に説明し、研究へのデータ使用について了解を求めた上で、データ使用の可否をアンケート調査の中に質問項目として設けた。結果、2名がデータ使用について否と回答したため除外している。

#### 4. 結果

実施したアンケート調査の回答方法は、「全くあてはまらない」から「かなりあてはまる」までの6件法で、「全くあてはまらない」を1点とし、順に「かなりあてはまる」まで1点刻みで6点とし、得点化している。アンケートの有効回答数89で回収率は94.7%であった。

##### 1) 運動遊びへの関与レベルの分析

表1 運動遊びにおける関与の度合い(レベル)の度数分布

評価	レベル	評価スケール	度数(人)	%
不適切	1	①子どもたちの運動遊びにはめったに関わらなかった	12	13.5
		②子どもたちの運動遊びの幅を広げるようなアドバイスをすることはなかった		
最低限	2	③屋内外で子どもたちの運動遊びに関わっていた	31	34.8
		④他の先生方と子どもたちの動きや発達の様子について情報を共有していた		
		⑤子どもたちと運動遊びをする際には、遊び方の見本を示したりしながら関わっていた		
よい	5	⑥動かない子どもたちや活発に動きたがらない子どもたちに対して動くように促していた	0	0.0
		⑦子どもたちが自ら努力していることを支えるべき時と自分でやり遂げるのを見守るべき時とわかりながら、働きかけていた		
		⑧難しいことをしようとしたときに手助けをしたり、どうしたらうまくできるようになるのか話し合ったりすることで、子どもたちと一緒に活動を振り返ったりしていた		
とてもよい	7	⑨運動や運動遊びに関する情報や知識を得たりして、絶えず理解を深めようとしていた	10	11.2
		無効	3	3.4
		合計	89	100.0

表1は実習時を振り返ってもらい、運動遊びへのどの程度関わっていたか尋ねた結果である。レベル1からレベル7までとレベルが上がるにつれて深くかかわっていたということになる。最も多かったのはレベル1からレベル2までの段階であり、48.3%と半数近くを占めている。次に多いのはレベル3からレベル4の段階で、29.2%、レベル5からレベル7の段階は19.1%で最も少なくなっている。関与度については全体的な低さとレベルの2極化の傾向が結果として示された。

##### 2) 運動・スポーツ活動や運動遊び指導に関する項目の分析

表2は運動やスポーツ活動に対する意識について質問した結果を得点化し、平均値を算出したものがある。全体的には「かなりあてはまる(6点)」の方向に多く分布する傾向にあり、体を動かすことに対して好意的で、

スポーツをすることや見ること、過去の体育の授業についても肯定的にとらえている学生が多い傾向にある。

運動遊び指導に対しては表3に結果を示しているが、10項目の中で「かなりあてはまる(6点)」の方向で平均値が高い傾向にあるのは「運動遊び指導をすといっても何を指導したらよいかわからない」が最も高かった。次に「クラスや集団を動かすことに不安を感じる」、「子どもたちに運動遊びを考え、提案することは難しい」、「運動遊び指導の際の補助や声掛けのし方に不安を感じる」と続いており、運動遊び指導への不安や心配が強い様子が窺えた。

次に、運動遊び指導への関与レベルと運動・スポーツ活動や運動遊び指導に関する14項目との関連について分析を行った。分散分析を行い、有意差が認められた項目のみ表4に示している。運動・スポーツ活動に対する意識については有意な差は認められなかったが、運動遊び指導に関する意識の項目で4項目に有意な差が認められている。有意差が認められた項目ではレベル1とレベル7の平均値は1.23ポイントから2.2ポイントあり、その差が明らかである。例えば「クラスや集団を動かすことに不安を感じる」では2.0ポイント、「運動遊びの際の補助や声掛けのし方に不安を感じる」は1.98ポイントの差がある。また、「運動遊びを指導するといっても何を指導したらよいかわからない」についてはレベル1に次いでレベル6、レベル5の平均値が高くなっていたり、「クラスや集団を動かすことに不安を感じる」ではレベル6が高くなっていたりするなど項目によって特徴的な傾向を示している。

表2 運動やスポーツに対する意識

	度数(人)	平均値	標準偏差	歪度	尖度
1-1. 全般的に体を動かすことは好きである	89	4.78	1.259	-0.646	-0.715
1-2. 全般的にスポーツをすることは好きである	89	4.64	1.308	-0.549	-0.859
1-3. 全般的にスポーツをみることは好きである	89	4.31	1.345	-0.483	-0.578
1-4. 小・中・高校での体育の授業は好きだった	89	4.52	1.366	-0.433	-1.153

表3 運動遊び指導に対する意識

	度数(人)	平均値	標準偏差	歪度	尖度
2-6. 運動遊びを指導するといっても何を指導したらよいかわからない	89	4.00	1.31	-0.063	-0.769
2-7. クラスや集団を動かすことに不安を感じる	89	3.88	1.40	-0.184	-0.829
2-2. 子どもたちに運動遊びを考え、提案することは難しい	89	3.82	1.19	0.027	-0.442
2-9. 運動遊びの際の補助や声掛けのし方に不安を感じる	89	3.73	1.18	-0.170	-0.652
2-8. 子どもたちが運動遊びを思い切り楽しむより、ケガや事故の方が心配である	89	3.38	1.09	0.630	0.177
2-10. 運動遊びについて自主的に学んだり考えたりすることがある	89	3.28	1.16	0.327	0.277
2-3. 特に指導しなくても、子どもたちは自由に運動遊びをしていけばよい	89	3.00	1.07	0.000	0.098
2-4. 運動遊びの指導は、外部の指導者に任せればよい	89	2.67	1.14	0.389	-0.170
2-1. 子どもたちに運動遊びの指導はしたくない	89	2.60	1.33	0.874	0.079
2-5. 子どもたちと一緒に運動遊びに興じる必要はない	89	1.70	0.82	1.128	0.875

表4 関与レベル別に見た運動やスポーツ及び運動指導に対する意識（有意差のある項目のみ）

項目	関わり方のレベル	度数(人)	平均値	標準偏差	自由度	F値	有意確率	
2-6 運動遊びを指導すると いっても何を指導したら よいかわからない	レベル1 不適切	12	5.00	1.044	5	3.415	0.008	
	レベル2	31	3.77	1.359				**
	レベル3 普通	10	3.70	1.337				
	レベル4	16	4.25	1.238				
	レベル5 よい	0	-	-				
	レベル6	7	4.57	1.272				
	レベル7 とても良い	10	3.10	0.738				
	合計	86	4.01	1.315				
2-7 クラスや集団を動かすことに 不安を感じる	レベル1 不適切	12	4.83	1.030	5	2.571	0.033	
	レベル2	31	3.94	1.413				*
	レベル3 普通	10	3.80	1.229				
	レベル4	16	3.75	1.571				
	レベル5 よい	0	-	-				
	レベル6	7	4.00	1.291				
	レベル7 とても良い	10	2.80	1.135				
	合計	86	3.88	1.401				
2-8 子どもたちが運動遊びを思い 切り楽しむより、ケガや事故の 方が心配である	レベル1 不適切	12	3.83	1.193	5	2.364	0.047	
	レベル2	31	3.35	1.253				*
	レベル3 普通	10	3.00	0.667				
	レベル4	16	3.81	1.047				
	レベル5 よい	0	-	-				
	レベル6	7	3.14	0.690				
	レベル7 とても良い	10	2.60	0.699				
	合計	86	3.36	1.105				
2-9 運動遊びの際の補助や声掛 けのし方に不安を感じる	レベル1 不適切	12	4.58	0.996	5	3.477	0.007	
	レベル2	31	3.74	1.210				**
	レベル3 普通	10	3.70	1.059				
	レベル4	16	3.69	1.078				
	レベル5 よい	0	-	-				
	レベル6	7	3.86	1.069				
	レベル7 とても良い	10	2.60	1.075				
	合計	86	3.36	1.105				

\* p<.05 \*\* p<.01 n.s.(not significant)

### 3) 運動遊びへの関与レベルと運動・スポーツ活動や運動遊び指導に対する意識との関係について

運動遊びへの関与レベルと運動・スポーツ活動や運動遊び指導に対する意識との関係について分析を行った。まず、運動・スポーツ活動や運動遊び指導に対する意識に関する14項目について主因子法による因子分析を行った。1回目の因子分析で得られた結果では固有値の変化と因子の解釈可能性を考慮すると、3因子構造が妥当であると考えられた。その後2回目の因子分析をした結果、十分な因子負荷量を示さなかった2項目を分

析から除外し、残りの12項目に対して再度、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。プロマックス回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を表4に示す。なお、回転前の3因子で12項目の全分散を説明する割合は64.9%であった。

各因子名については、第1因子は4項目で構成されており、「全般的に体を動かすことは好きである」や「小・中・高校での体育の授業は好きだった」、「全般的にスポーツをすることは好きである」など運動やスポーツ活動への関わり方に関する項目が高い負荷量を示していた。そこで「運動やスポーツ活動への意識」因子と命名した。第2因子は5項目で構成されており、「運動遊びの際の補助や声掛けのし方に不安を感じる」や「クラスや集団を動かすことに不安を感じる」など運動遊び指導への不安や心配に関する内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで「指導への不安や心配」因子と命名した。第3因子は3項目で構成されており、「子どもたちと一緒に運動遊びに興じる必要はない」や「運動遊びの指導は、外部の指導者に任せればよい」など運動指導に関わる保育者の役割に関する内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで「保育者の役割意識」因子と命名した。

次に運動やスポーツ活動及び運動遊び指導に関する項目については、3因子を下位尺度としてもつことが明らかとなったため、その尺度に属する調査項目の得点を合計し、平均したものを下位尺度得点とした上で、これを説明変数（独立変数）、運動遊びへの関与レベルを基準変数（従属変数）として運動遊びへの関与レベルに与える影響を検討するために重回帰分析を行った。その結果については表5に示しているが、「指導への不安や心配」から運動遊びへの関与レベルに対する負の標準偏回帰係数（ $\beta$ ）が有意である一方で、「運動やスポーツ活動への意識」と「保育者の役割意識」から運動遊びへの関与度に対する標準偏回帰係数は有意ではないという結果が得られた。

表5 運動・スポーツ活動や運動遊び指導に対する意識の因子分析結果

	F1( $\alpha=.893$ )	F2( $\alpha=.775$ )	F3( $\alpha=.724$ )	
<b>【F1:運動やスポーツへ活動への意識】</b>				
1-2. 一般的にスポーツをすることは好きである	.938	.018	-.032	
1-4. 小・中・高校での体育の授業は好きだった	.907	-.042	.095	
1-1. 一般的に体を動かすことは好きである	.864	-.012	-.023	
1-3. 一般的にスポーツをみることは好きである	.783	.086	-.051	
<b>【F2:運動遊び指導への不安や心配】</b>				
2-9. 運動遊びの際の補助や声掛けのし方に不安を感じる	.013	.862	-.154	
2-7. クラスや集団を動かすことに不安を感じる	-.116	.785	-.142	
2-8. 子どもたちが運動遊びを思い切り楽しむより、ケガや事故の方が心配である	.173	.702	.095	
2-2. 子どもたちに運動遊びを考え、提案することは難しい	.052	.645	.089	
2-6. 運動遊びを指導するといっても何を指導したらよいかわからない	-.161	.553	.258	
<b>【F3:保育者の役割意識】</b>				
2-5. 子どもたちと一緒に運動遊びに興じる必要はない	-.055	-.132	.821	
2-4. 運動遊びの指導は、外部の指導者に任せればよい	.022	.123	.803	
2-3. 特に指導しなくても、子どもたちは自由に運動遊びをしていけばよい	.027	.0158	.762	
	因子間相関	F1	F2	F3
	F1		-.347	-.034
	F2	-.347		.317
	F3	-.034	.317	

因子抽出法: 主因子法 回転法: プロマックス法

表6 関与度(レベル)との関係について (重回帰分析:強制投入法)

説明変数	標準化係数( $\beta$ )	R <sup>2</sup>
F1 運動への関わり方	-0.03 n.s.	
F2 指導への不安や心配	-.305 **	0.11 *
F3 保育者の役割意識	-.091 n.s.	

基準変数:関わり方のレベル \*\* p<0.1 \* p<.05 n.s.(not significant)

## 5. 考察

今回用いた調査による結果では、関与レベル6、7の高い学生は全体の19.1% (17人)であるのに比べて、レベル1,2が48.3% (48人)と全体の約半数近くを占め、レベルの高い学生と低い学生が2極化している傾向にある。学生は実習であるにしても保育現場で自らが保育者という立場で、他の保育者や子どもと対峙して運動遊びへ関わる経験はほぼ初めての経験である。しかし、今回の調査で「自由あそびの時間に子どもたちと運

動遊びをしましたか」という質問については97.8% (87人) が「した」と回答しているのにもかかわらず、運動遊び指導に対する意識に関する項目で「運動遊びを指導するといっても何を指導したらよいかわからない」の平均値が最も高かった。つまり、遊びとしての経験や知識はあっても、運動遊びを指導する、支援するといった視点からの関わり方が深まっていなかった可能性が高い。

次に、その学生の運動やスポーツ活動及び運動遊び指導への意識と関与レベルについて分析を試みた。分析結果の関連を図1に示している。運動やスポーツ活動及び運動遊び指導への意識の項目が潜在的に持つ3因子の「運動やスポーツ活動への意識」「運動遊び指導への不安や心配」「保育者の役割意識」と運動遊び関与レベルとの重回帰分析の結果は、3因子のうち「運動活動への意識」や「保育者の役割意識」との関係は見られず、「運動遊び指導への不安や心配」のみが負の影響を与えていた。運動遊び指導への不安や心配が少ないほど運動遊びへの関与が高く、運動遊び指導への不安や心配が強いほど運動遊びへの関与が低いという関係が存在しているということである。

そこで「運動遊び指導への不安や心配」因子の調査項目を見ると、「運動遊びの際の補助や声掛けのし方に不安を感じる」「クラスや集団を動かすことに不安を感じる」「子どもたちが運動遊びを思い切り楽しむより、ケガや事故の方が心配である」の因子負荷量が高いことから、補助や声掛けへの不安、集団の動かし方への不安、ケガや事故の心配などあるため、運動遊び指導場面で積極的に関わることができていないと考えられる。

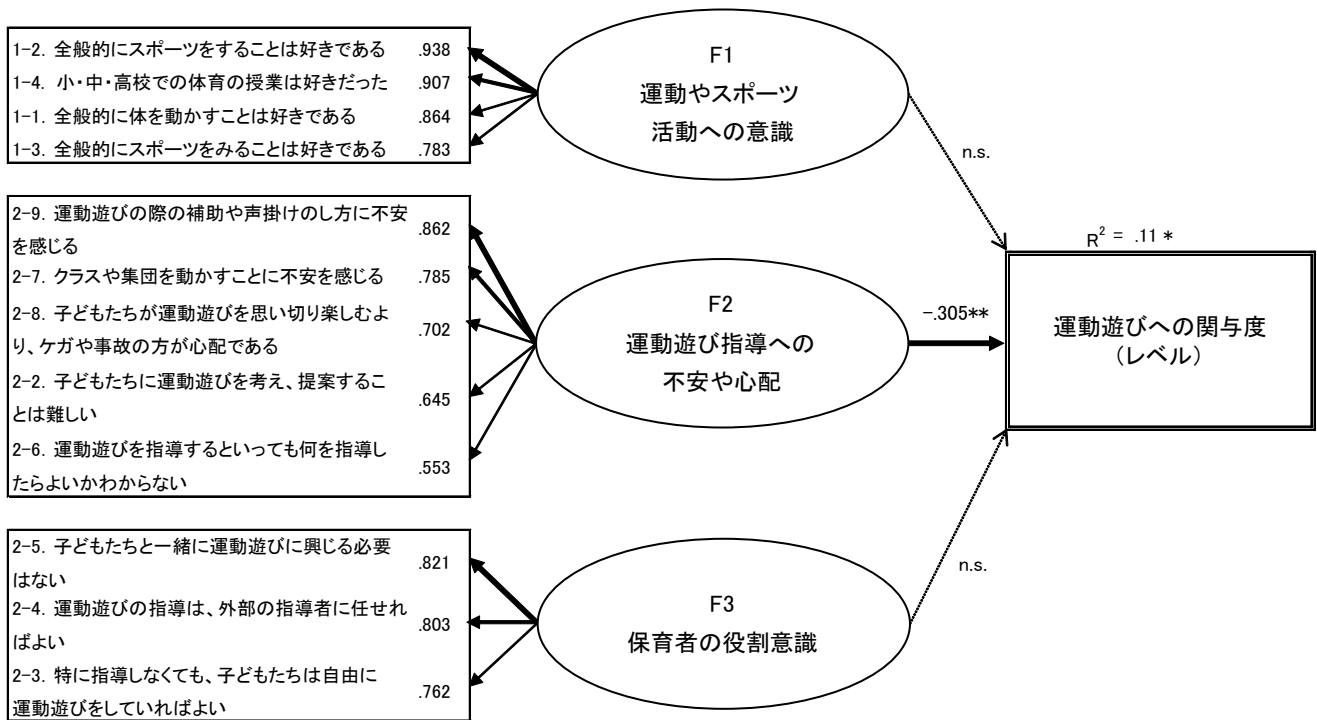


図1 運動遊びへの関与度との関係

筆者が実習後の振り返りレポートの分析より、運動遊び指導における学生の意識について調査した過去の研究(中尾,2013)では、実習中の運動遊び場面では環境構成に関心が高く、その中でも安全面への配慮、特に子どもたちを観察し危険を見極めることに多くの関心が向けられていた。また先生と子どもの関係に着目し、保育者が子どもと遊ぶところを観察しながら、その関係づくりにおいて言葉かけが重要だという認識を持っていた。今回の分析結果でも運動遊び指導に関して認識していることは同じような傾向があり、これが運動遊びへの関与度にも影響与えていたことが改めて明らかになった。

これらの結果を受けて、筆者が担当している「保育内容演習Ⅰ(健康)」及び「子どもと運動」の授業内容について振り返ると、前回の調査研究結果から、遊びの危険性の問題と声のかけ方については意識して改善を



してきたところであった。遊びにおける危険性については保育内容演習Ⅰ（健康）で「安全管理と安全教育」という回を設け「リスクとハザード」という概念を用いて、全てを取り除くのではなく、遊びの価値として内在する冒険や挑戦の対象であるリスクは環境の中に残し、子どもに経験させたり共有させたりすることで、回避能力を高めていく、それと同時に遊びの価値とは関係ないところで起こる危険性であるハザードは徹底して管理して取り除くという意識を持たせるようにリスクとハザードのマネジメントの必要性を伝えてきた。また、言葉かけや集団の動かし方についても、「子どもと運動」の中で、状況に応じた言葉かけや誘い方について取り上げ、日常の中でも言葉かけのレパートリーを増やすことや集団を動かすときは基準や指示を明確にすることを意識するように伝えていた。しかし今回の結果は実習場面で実際に関わってみて知識としては理解していても、その場面に直面すると思うように動けなかった、言葉が出なかった、他の保育者とコミュニケーションがうまくとできず、情報が共有できていなかったなど、実習生の振り返りではよく語られる内容と重なる。また、楠本ら（2003）が主任保育者と教育実習生の言語的応答を比較した研究の中で、主任保育者は「代弁」「非指示的リード」「情報伝達」を用いて子どもに応答することが多いことを指摘しているが、これは子どもとの信頼関係や子どもの視点に立つ間接的な言葉かけのレパートリー、保育場面での視野の広さなど経験により蓄積されたものであり、現場経験のない学生にとってはその不安は解消できていない様子が窺える。

この不安を解消する方法としては、運動遊びを実際の保育場面を想定して学生自身が授業の中で実践する機会をできるだけ多く設定する必要がある。実践する場面について授業内容を振り返ると授業内では部分的にグループ学習を採り入れて、既存の運動遊びの工夫・改善、新たな運動遊びを創造する機会を設けていた。しかし、模擬保育を通じて子どもがより楽しいと感じるためにはどうすればいいのかということを考え、企画して実践をするという機会は、「子どもと運動」の授業においてはサーキット遊びと運動会の企画・発表のみで主体的に学び、実践する機会が不足していた。そして子どもと直接関わりながら自分たちが計画した遊びを実践し、自己評価しながら改善していくという機会が授業内ではなく、その機会は授業外でのボランティア活動等に求めているところもあるが、単なるプログラム提供や手伝いに終始し、運動遊びの指導や支援を意識した関わり方はあまりできていない状況であった。令和元年度、本学 HOP ステーションの事業で、子育て支援の活動として運動遊びを学生に協力してもらい行ったが、このような機会を活かし、授業の一環として取り入れていくこともひとつの方法であると考えられる。

加えて調査の項目の中で「運動遊びについて自主的に学んだり考えたりすることがある」と他の項目との相関を見ると「子どもたちに運動遊びを考え、提案することは難しい」と「運動遊びを指導するといっても何を指導したらよいかわからない」は1%水準で有意な相関（負の相関）があった。このことから、主体的に考え、学ぶ機会をさらに増やしていくことが運動遊びへの不安や心配を取り除くことにも繋がるものと考えられる。

## 6. 総括

今回の調査の分析結果から、以下のことが明らかとなった。

- ①実習時の運動遊びへの関与度は関与レベル6、7の高い学生は全体の19.1%（17人）であるのに比べて、レベル1,2が48.3%（48人）と全体の約半数近くを占め、レベルの高い学生と低い学生が2極化している傾向にある。
- ②運動遊びへの関与度（レベル）に影響を与えているのは「運動遊び指導への不安や心配」であり、特に「運動遊びの際の補助や声掛けの仕方に不安を感じる」「クラスや集団を動かすことに不安を感じる」「子どもたちが運動遊びを思い切り楽しむより、ケガや自己の方が心配である」ということが関係ある。
- ③授業改善に向けては「運動遊びの際の補助や声掛けの仕方への不安」「クラスや集団を動かすことへの不安」への対応について実践的に学べる機会の確保、特に子どもと直接関わりながら自分たちが計画した遊びを実践し、自己評価しながら改善していく機会を設け、主体的に考え学ぶ機会を増やすことが示唆された。

杉村ら（1991）は保育者の指導方法には「受容的方法」と「意図的方法」の2つの方法があることを示しているが、経験豊富な保育者はこの2つがバランスよく混在しており、経験のない学生にとっては2つのバランスをどう

保つかは難しい課題かもしれない。しかし、保育態度の中でも言語的応答については意識して学生も実習中に現場保育者を観察していることでもある。直接、子どもと関わる経験が少ない学生にとって、実習事後指導において自分自身がどのような言語的応答をしているか、モデルとなる現場保育者との違いを俯瞰的に振り返りを促すことも、不安の解消につながりその後の実践に活かされると考えられる。

今後に向けて、この結果を活かし、授業改善や学生指導に反映していきたいと考えている。

## 7. 今後の課題

実習時の運動遊びへの関与レベルを明らかにし、それに影響を与える要因を明らかにしていったが、関与レベルを評価するスケールは実際には保育現場の環境の質を全体的に問う中のひとつの項目であり、保育者が体を動かす遊びのための環境を振り返るスケールとして作成されている。将来保育者を目指す学生達であり、項目に回答したことで関わり方のレベルを認識することを期待してはいるが、実習時に求められている学生のレベルを図るスケールとして適しているかどうかということについては、今後検討していかなければならない。また、今回の結果を授業改善や学生指導にどう反映させていくかについては、具体性に乏しいが、今後も振り返りつつ授業研究を進めながら、改善していきたいと考えている。

## 引用参考文献

- (1) 青木通・浪越一喜・中尾健一郎・石井十郎(2019) 大学生の運動遊びの指導に対する認識と保育者養成の課題. 文京学院大学人間学部研究紀要 Vol.20, 133-139.
- (2) Calol Archer & Iram Siraj (2017) Movement environment rating scale (MOVER) for 2-6-year-olds provision : Improving physical development through movement and physical activity. Trentham Books; Illustrated edition. (秋田喜代美(監訳)・淀川裕美・辻谷真知子・宮本雄太(訳)(2018)「体を動かすあそびのための環境の質」評価スケール 保育における乳幼児の運動発達を支えるために. 明石書店.)
- (3) 楠本千里・山崎晃(2002) 子どもに対する言語的応答を観点とした保育者の専門性—担任保育者と教育実習生の比較を通して—. 保育学研究第40巻第2号, 90-96.
- (4) 杉村信一郎・桐山雅子(1991) 子どもの特性に応じた保育指導—Personal ATI Theory の実証的研究—. 教育心理学研究, 39,31-39.
- (5) 中尾健一郎(2013) 運動遊び指導における学生の意識について—実習後の振り返りレポートの分析より—. 全国保育士養成協議会第52回研究大会研究発表論文集, 240-241.
- (6) 浪越一喜・青木通・中尾健一郎・石井十郎(2018) 体育及び運動遊び指導をめぐる保育者養成の課題. 日本保育学会第71回大会要旨集, 545.
- (7) 日本発育発達学会(2014) 幼児期運動指針実践ガイド, 杏林書院.
- (8) 文部科学省(2011) 体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究 報告書.
- (9) 文部科学省幼児期運動指針策定委員会(2012) 幼児期運動指針ガイドブック～毎日、楽しく体を動かすために～